令和８年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【大谷場東小学校】

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する資質・能力	（1）デジタルとリアルを使い分け、様々な情報を取捨選択して活用する資質・能力 （2）自分の考えを整理し、筋道を立てて表現する力
⇓	
実施する学力向上策【時期・頻度】	・動画や画像の提示と実物の観察などの体験を組み合わせ、デジタルとリアルを効果的に統合した授業を展開する。【通年】 ・「個別最適な学び」を推進し、校内で授業公開や教材研究を行い、指導力の向上を図る。【通年・全教員年２回以上】 ・様々な教育データを「スクールダッシュボード」で可視化し、次時の授業に生かす【通年】 ・ICTを活用して、調べる、学ぶ、話し合う、聞く、作る、協働するなどの学習を取り入れる【各単元で１回以上】 ・表現方法の工夫、温かい人間関係づくりなどを通し、誰もが発言しやすい環境を整えることで表現力を高め、学級経営を含めた授業力の向上を図る。【通年】

⑤	年度末評価	
学力向上策の実施状況	評価（※）	
⇓		
今年度の成果と次年度の課題		

※評価　Ａ８割以上（達成）　Ｂ６割以上（おおむね達成）　Ｃ６割未満（あ

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
⇓	
結果から考えられる児童生徒の実態	

③	中間評価	
学力向上策の実施状況	評価（※）	
⇓		
学力向上策の見直し		

※評価　Ａ８割以上（達成）　Ｂ６割以上（おおむね達成）　Ｃ６割未満（あ

令和７年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【大谷場東小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	・学力のこ極化がみられるため、スクールダッシュボードを活用して個々の理解度を把握し、授業改善に生かしていく。また、引き続き本校の研修テーマである「個別最適な学び」に絞り付けて取り組む。 ・周囲と実際の現象や事象を関連付けるため、デジタルで動画や画像を提示するだけでなく、実物の観察などリアルな体験を組み合わせ、デジタルとリアルを効果的に統合した授業を展開する。 ・図や表、グラフなどから読み取れることを言葉で表現することに課題があるため、語彙力向上に向けて読書の機会を増やし、言語化する力を育てる。
思考・判断・表現	・協働的な学習を通して、間違いを恐れずに解答できる児童を育成しようと努めているが、発言が特定の児童に偏ってしまう場面もある。意図的指名や発表以外の表現方法の工夫、温かい人間関係づくりなどを通し、誰もが発言しやすい環境を整えることで、学級経営を含めた授業力の向上を図る。 ・問題の資料を基に選択肢から解答することはできているが、記述問題になると解答できない児童が多い。記述の仕方を身につける必要があるとともに、自分の考えを整理し、筋道を立てて表現する力が課題である。ICTを活用し、表現力を高める授業の充実を図る。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> ・多くの児童が基礎的な知識・技能の定着を図れているが、二極化している。 <指導上の課題> ・児童の理解度を把握し、指導に生かしたり、個に応じた指導を展開したりする必要がある。	⇒ ・本校の研修のテーマである「個別最適な学び」を実現するために校内で授業公開を行い、指導力の向上を目指す。【通年・全教員年１回】 ・「スクールダッシュボード」を活用して、児童の理解度の把握に努め、次時の授業に生かす。【通年】 ・授業のめあてを工夫し、学習の目標を児童が決められるように授業を展開する。【通年】
思考・判断・表現	<学習上の課題> ・児童は失敗を恐れる傾向があり、自分の考え・思いを表現することが苦手である。 <指導上の課題> ・デジタルとリアル両面のよさを生かして様々な表現方法の指導をしていく必要がある。	⇒ ・評価の観点を明確に示し、児童が表現の仕方を見通しをもって進められるようにする。【通年】 ・様々な意見を受け入れられる雰囲気を作るために、互いに認め合える学級経営、授業経営を行う。【通年】 ・ICTを効果的に活用して、学習モデルや様々な表現方法を示すと共に、協働的な学習を進め、表現したいと思える課題を工夫する【通年】

⑤	評価（※）	学力向上策の実施状況
知識・技能	A	「個別最適な学び」を実現するためにすべての教員が校内で授業公開を行うことができた。参観した教員が参観シートによい点、改善点等を記入し、教員室に掲示した。指導力向上のための様々な方策や指導法に触れることができた。また、校内でスクールダッシュボードの活用の研修を行い、活用の仕方を学んだ。教職員アンケート「スクールダッシュボードの活用」の項目で肯定的な回答が７０％となり、個々の児童理解を深めて、授業を展開する教職員を増やすことができた。またスクールダッシュボードだけでなく、ノートに振り返りを書かせて、次の授業に生かす教員も見られた。デジタルとリアルを使い分けて、個に応じた指導を意識的に行った。
思考・判断・表現	A	教職員アンケートによると、授業で評価の観点を示している教員は９４％、ICTを活用して学習モデルや表現方法を示した授業は８９％、表現したくなる課題の工夫は１００％、協働的な学習への意識は９２％が肯定的な回答であった。評価の観点を示すことで、児童は「どのように表現すればよいか」を考え、自分の思考を整理して表現に生かすことができたと考えられる。授業公開では、算数で問題文に線を引いたり、自分で疑問点を考えたりする学習活動や、協働的な学習を意識し、間違いを恐れずに解答しようとする姿を促す授業が多くみられた。

※評価　Ａ８割以上（達成）　Ｂ６割以上（おおむね達成）　Ｃ６割未満（あ

②	全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）
知識・技能	すべての教科の正答率について、国や県の正答率の平均を大きく上回っている。国語の正答率は７割弾平から８割となっている。算数については８割弾の正答率であるが、２（2）台形の意味や性質についての問題の正答率が５割強のため、図形、特に台形を構成する要素について習熟を図る必要がある。理科においては、２（1）身の回りの金属の電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識についての問題の正答率が低かった。鉄だけが有する磁石に引き付ける性質を理解できるように、日常生活で磁石を使って、様々な金属で試す機会があるとよいと考える。金属が電気を通さないと回答する児童も多かったため、電化製品で使われている金属について、授業で取り上げることも有効であると考える。
思考・判断・表現	全教科の正答率は、国・県の平均を上回ることができている。しかし、国語の「話すこと・聞くこと」に関する平均値の差はわずかであるため、課題と考える。１―の目的や意図に応じて、課題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかの問題で、話し手の意図を読み取る力に課題がある。また、３三（1）の目的に応じて必要な情報を見つけることができるかどうかの問題でも正答率が下がっており、必要な情報を整理して読み取る力にも課題がある。算数については、表現力・記述力や問題の意図を理解して答えるための読解力に課題がみられた。普段の授業から、問題の意図を読み取る力や答えを自分で表現したり、考えて記述したりする機会を増やすよいと考える。

④	さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）
知識・技能	すべての学年・主要教科の平均正答率は、概ね市平均をよ回り、基礎の定着が確認できる。　高学年では４教科で優位性があり、算数は「図形」「データの活用」などで高水準であった。一方、階尺を用いた実長の算出や図形構成の見取り、複合グラフの読み取りでは伸び悩む設問がみられる。理科は、知識の想起と観察結果の結び付けを意識した指導が有効と考える。また、小４算数では、数を読め図から平均値出を見付ける、グラフの読み取りで選択が分散し、根拠確認の徹底が必要である。理科の基礎概念が総対的に低いため、用語と現象の対応付けに設さ（例：電気・磁石、気体や液体の基本）がみられる。算数のデータ・資料領域でエスが低立ち。表・グラフの補読に課題がある。そのため、理科では、実物と用語を結び付ける授業が有効であると考える。また、算数（資料領域）では、表・グラフから読み取れることを言葉に変換する学習が考えられる。
思考・判断・表現	全体として市平均は上回るが、目的把握→情報整理→根拠提示→表現のプロセス型課題では市との差が縮まる場面がある。国語は「話す・聞く・書く」において段落構成・理由付け・物手意識が弱い段階がみられる一方、資料活用の記述は学年によって二極化がみられる。算数は段階型図の読み取り・図表での使用・思考過程での根拠の明確さが得意者に偏っており、図・表・言葉の三点セットで思考を可視化する授業が効果的と考える。算数の関係把握と式選択（割合・比の換算段階でつまずき）が課題である。　国語は概ね高位だが段階間でばらつき（資料の引用の仕方・段落構成などで差が出る）がある。そのため、主張・根拠・具体例・結論の順に、自分の考えを展開できるようにする。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	・校内の授業公開は、２学期から行う予定である。 ・スクールダッシュボードの活用については、教職員へのアンケートで肯定的な回答が４２％にとどまっている。使い方を知り、使いやすさを実感できるようにする必要がある。 ・学習の目標を児童が自己決定できるように、授業のめあてを工夫している教職員は９６％に上った。引き続き、授業のめあてを工夫して、個に応じた指導を行う。	・スクールダッシュボードの活用方法の研修を行い、身近に使いやすくする。【９月】
思考・判断・表現	A	・教職員アンケートによると、授業で評価の観点を示すことは８９％、ICTを活用して学習モデルや表現方法を示した授業については８８％、表現したくなる課題の工夫は９６％、協働的な学習への意識は全教員が肯定的な回答をしている。 ・児童が表現方法を絵でリーフレットにしたり、ICTを活用してスライドを作ったりして発表していた。学年が上がるにつれ、表現方法の工夫がみられた。	・問題の意図を読み取れるように、授業の中で問題文を確認したり、答えの理由を考えさせたりする。【通年】

※評価　Ａ８割以上（達成）　Ｂ６割以上（おおむね達成）　Ｃ６割未満（あ